2019年
3月 1日
No. 113
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり

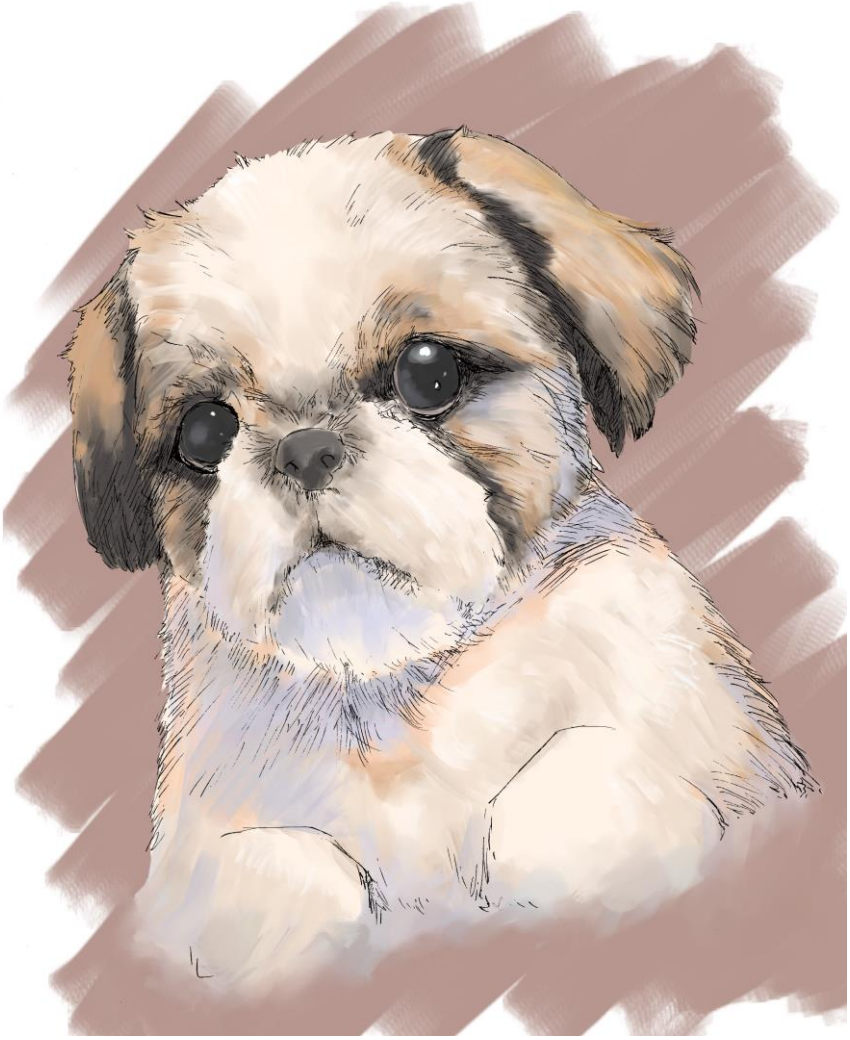

イラスト
高津

会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピアサポート基金により作成されています

Ｉｎｄｅｘ

2ページ　手紙を活用したピア・アウトリーチ開発事業推進委員会⑤
こころのピアサポートフォーラム参加報告
3ページ　SANGOの会初心者例会～新春書初め
NPO活動が満 20 年～来年度へ向けての指針
4ページ　ひきこもり本人や家族に寄り添う支援とは
5ページ　社会的孤立の広がりと地域における包括的支援の展望
6ページ　北方ジャーナル　一人称で語る田中理事長の足跡
北海道新聞に居場所「よりどころ」の記事が掲載
7ページ　居場所「よりどころ」活動報告／さえきたいちさんとの対話⑤
8ページ　こちら事務局／編集後記

手紙を活用したピア・アウトリーチ開発事業推進委員会⑤を開催

２月２日土曜日、道内のひきこもり当事者団体の関係者が集まり第５回手紙を活用したピア・アウトリーチ開発事業推進委員会を開催した（写真-1）。委員会では今年度絵はがきを受け取った当事者から寄せられたアンケート調査票をコンピュータソフトウエアで解析し、その結果をもとに意見交換をした。アンケート結果から、絵はがきの送付について「当事者目線で続けてほしい」「反応がなくても送り続けてほしい」といった意見もあり、来年度は継続申し込み者に対して意向を聞いたうえで送付する。情報伝達手段が多様化していくなかで私たちは「デジタルからアナログへ」という真逆的な活動を地道に取り組んできたが今後もこの活動を通して人間としてのぬくもりが拡がることを期待したい。

（写真-1）第５回事業推進委員会の様子

事業内容をまとめた報告書が３月に発行されます。詳細は８ページを参照してください。

こころのピアサポートフォーラム２０１９ｉｎ北海道 参加報告

２月16日、17日、北星学園大学を会場にして「こころのピアサポートフォーラム２０１９in北海道」が開催。道内各地から大勢の当事者経験者や支援者などが集まった。

第一日目は基調講演と分科会が行われた。基調講演では、こころのリカバリー総合支援センターの阿部幸弘所長の進行のもと、一般社団法人北海道ピアサポート協会代表理事の矢部滋也氏と横浜市にあるピアサポートグループ在代表の加藤伸輔氏がピアサポートの可能性や課題について提言し理解を深めた。

矢部氏はピアサポートを語るときの「ピア」とは当事者という狭い意味だけではなく、職場内で働く仲間としてのピアがある、と指摘。リカバリーを促進する要素の一つとして位置づけられるピアサポートの役割として、単なる当事者同士の共感に留まらない、つながりの部分、関係性や地域づくりにその意義を述べた。これに対して加藤氏は東日本大震災の折、生きる希望を失いかけた自分が笑顔を取り戻すことができたのもピアサポートのおかげであるとし、対価をもらい職業としてピアサポートが位置づけられることの課題を挙げ、ピアサポートを言語で表現することの難しさに触れながら「自然発生的なピアサポートでしか味わえない感覚」がある、と同じ実践者として理解できる的を射た指摘を投げかけた。

第二日目に開催されたパネルディスカッション「発進～拡がるピアサポート～」では、精神障がい・ひきこもり・がん・学生の４分野のピアサポート実践報告が行われ、ひきこもり分野から当ＮＰＯの田中敦理事長が登壇し、会報「ひきこもり」の表紙でお馴染みの高津さんのイラストに触発を受けて、マラソン大会に出場するためのＴシャツのイラスト制作を依頼した当事者がひきこもりマインドを胸に秘めて完走した例を挙げ、当事者同士が織りなすピアサポートを紹介した。

パネルディスカッションの模様は2月26日付の北海道新聞（写真-2）に取り上げられ「ひきこもりは本人との接触は難しく、訪問支援は一番されたくないこと。本人に無理のないようにどう接点を持つかが課題だ」と述べた田中理事長のコメントが掲載された。

6日（火曜日） 北海道新聞

「ピアサポート」を考える
札幌でフォーラム

経験生かし相手に寄り添う

精神疾患のあるA氏、同じような状況と悩みを持つ人らが支えるコミュニティ「ピアサポート」。自分の経験を生かして相手に寄り添い、回復を目指す取り組みの大切さに目を向けた。

近年は精神疾患に限らず、ひきこもりの人や心が疲れ、学生時代の学業支援などにも「広がってきた」。16、17日の両日には「こころのピアサポートフォーラム2019 in北海道」（北星学園大学ほか）が開催され、各地から取り組みを進める人たちが集まった。

ピアサポートの現状や課題について語り合ったパネルディスカッション＝17日

◆精神疾患
「集い」開催し
スタッフ交流

◆がん患者
「サロン」中心
体験語り合う

◆ひきこもり
本人との接点
持ち方が課題

（写真-2）２月 26 日付北海道新聞の記事

ＳＡＮＧＯの会初心者例会～新春書初め

１月24日木曜日午後５時30分から午後８時００分まで「ＳＡＮＧＯの会」１月新春初心者例会が札幌市総合福祉センターで開催、吹雪のなか５名が参加した。当会恒例の新春書初めを実施。参加者それぞれが思いを言葉に託した。

Ａさんは９月からＳＡＮＧＯの会に足を運び同じ境遇の人たちのかかわりなかで元気を取り戻してきたことを語り今年の一文字を「歩」に込めた。そこには少しずつ前に進めていけたらという思いがあった。Ｂさんは今回初めてＳＡＮＧＯの会に参加した。ＳＡＮＧＯの会に行くかどうかは今日決めたという。いろいろと避けて考えてきたが「自分がこうしてほしかったんだ」と素直に受け止められたとき、他のものに目を向けられるようになった。今年は元号も変わることだし自分で何かできたらよいという思いから「新」という一文字を挙げた。

続くＣさんは長く親との関係に苦しむ日々であったがそれでもさまざまな自助会に参加しながら自分と向き合ってきた。考える中で頭をよぎった「放」という言葉に願いを込め自身が束縛から解き放たれたいと述べる。遅れて参加したＤさんは真っ先に「休」という言葉を掲げた。自分はこれまで突っ走りガス欠状態となり燃え尽きてしまう経験があった。適度に心身を休めるよう心のブレーキをかけていきたいと抱負を語る。最後に田中敦理事長は「望」を掲げた。ＮＰＯ活動満20年、法人化10年というターニングポイントにさしかかった団体活動の展望について触れた。それぞれが語る願いが叶いますように期待してやまない。

ＮＰＯ活動が満20年 来年度へ向けての指針

生きにくさを抱える人たちが増していくなかでそうした人たちの経験的知識が活かせる社会参加の道筋の一つとして行動してきたＮＰＯ活動も今年で満20年を迎えることになりました。法人化したこの10年間は非常に忙しくピアスタッフの協力なくしては実現できなかったものも少なくありません。しかしその苦労を共にしたことで得られたものも数多く昨年６月には札幌市から委託を受け全国的にも珍しい当事者団体の当ＮＰＯと専門機関であるひきこもり地域支援センターとの協同運営で「ひきこもりに関する集団型支援拠点設置運営業務：通称よりどころ」を当事者会と親の会に分けて毎月１回開催してきました。新聞一面に取り上げられるなど新たなプラットホームに福祉関係者から注目されてきました。新年度はさらに創意工夫を凝らし拡充していけるよう努めていきたいと思います。

（田中　敦）

ご寄付ありがとうございます

野村　俊幸（カナリア基金）様　３万円

札幌市南区主任児童委員連絡会 様
１万９千円

工藤　清 様　２万円

当事者活動を円滑にすすめていくために活用していきます。

イラスト紹介

ハート型の頭をもつ縄文土器は人類の英知。象形文字は「ひきこもり」と記されている。遠大な人類の系譜が伺える。

イラスト　小松英行

ひきこもり本人や家族に寄り添う支援とは・・・
当事者経験者の発表　採録

12 月 22 日土曜日、北海道ソーシャルワーカー協会主催のセミナー「ひきこもり本人や家族に寄り添う支援とは・・・」が札幌エルプラザで開催され、札幌市内近郊から約 100 名が集まった。当 NPO の田中敦理事長ほかひきこもり経験者 2 名が登壇し経験から得られた話題が提供された。

「曖昧性のなかに希望を見出す」― 田中　敦 理事長

ひきこもり支援というのは曖昧な状況、グレーな状況を良しとして認めていくかどうかにかかっている。支援でもＡかＢかどちらかを選ぶような迫り方では当事者は行き詰る。曖昧な状況のなかで生きる意味とか働く意味などを自分なりに考え答えを出していく。この営みの多くの場合、仲間との信頼関係を築くなかで自信を取り戻したり、一方で働いていない自分を卑下したり、ときには働くことや生きる意味を見失ったりアルバイトをはじめても長続きしなかったり、再度ひきこもったりする。このように右往左往するなかで社会と接点を模索する課程なのだ。このようなぶれているプロセスを家族や支援者が良しとして認めていけるのかどうか、これが支援をする上で非常に重要だと思う。

受容とは役に立つか立たないかに関係なくその人そのものを受け止める行為だ。何か称賛できることがあり、それができたときに受け入れられるような評価の対象であってはいけない。このような肯定的な関係性ができれば気持ちは内から外へ向くようになる。親が誘導してどこかに結びつけるような支援ではなく、自らの意志で一歩踏み出すことができるようなプロセスを保証できる支援が必要だ。

「大失業時代の 94 件の応募と障害者雇用の２件の応募」― 蔵谷　俊夫 氏

私は広汎性発達障害の診断を受け、現在は障害者雇用枠で就職し物流センターで働いている。子どものころから人馴れせず、就職活動や仕事に支障がでる日々を送ってきた。前職の食品工場のパートに行き着くまでに応募した求人数は 94 件に達していたが、ことごとく不採用が続いた。障害者雇用では僅か２件目で就職することができた。私はこの違いを生み出したのは「誰が口をきいたのか」そのことに尽きると思う。私が採用された求人は非公開の求人で誰でも応募ができるのではなく、みどりの窓口（ハローワークにある障害者雇用専用の窓口）の職員がその仕事に合っていると考えられる人を絞り込んだうえで応募の意志を確認するものだった。この仕組みこそが採否に影響を与えたと思う。つまり 40 歳を前にしてキャリアが貧弱で履歴の空白がある場合、個人の自己アピールでは弱すぎる。企業と求職者をいかにマッチングさせるかが重要で就労については、国や自治体が出資し労働公社をつくり、ひきこもりなど一般的には理解されにくい人を直接雇用するシステムを提唱したい。

「当事者会は何にも縛られない自由な空間」― 武田　俊基 理事

私は大学を進路未定のまま卒業し 30 歳くらいまで在宅の生活が続いたため、親からの勧めもあり全国ひきこもり KHJ 親の会家族会連合会北海道「はまなす」にある当事者会へ参加した。当事者会には働いていない人が多く参加していたため世間体を気にせず家族以外の他者と関わりをもつことができた。また支援者を目指す大学院生やひきこもりに親和的な世話人との交流により、自分にも何かできると思える希望を得ることができた。また当事者会に参加する読書家や映画鑑賞を趣味にする人たちと接するうちに好きなことをしてもよいと思えるようになり、他の当事者会やひきこもり関係の講演会へも行き活動の幅が広がった。

ただし当事者会へ参加することで必ずしも活動的になる必要はないと思う。当事者会は当事者に変化を求める場ではなく、当事者会でどのように過ごすかは当事者が決めることだと思う。基本的に当事者会という場所は社会や家庭からの重圧から離れて何にも縛られることのない自由に過ごせる空間にすることが大切だと思う。

皆様からの投稿をお待ちしています

〒０６４－０８２４　札幌市中央区北４条西２６丁目３－２

「NPO 法人　レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局　通信編集部　宛

ｅ－ｍａｉｌ；info@letter-post.com

長期在宅ひきこもり当事者支援向け家族アセスメントツール開発事業
第２回支援開発検討委員会開催
～社会的孤立の広がりと地域における包括的支援の展望～

家族支援を通して長期にわたり在宅状態にあるひきこもり当事者の状態像を客観的に評価し、当事者本人に適切な支援が結びつくことを目的に「長期在宅ひきこもり当事者支援向け家族アセスメントツール開発事業」第２回支援開発検討委員会が 2018 年 12 月１日に開催された（写真）。委員会では道内の当事者団体や支援団体機関の専門職など 11 名の委員が集まり、今年度検討をすすめてきたアセスメントツールの最終検討、2018 年８月から 11 月に実施したひきこもり当事者に対する個別訪問面接の中から主要３事例の検討を行った。後半は、愛知教育大学准教授の川北稔氏から拡大するひきこもり 8050 問題を軸に家族の孤立予防について学んだ。

（写真）第２回支援開発検討委員会

◇8050 問題と社会的孤立

川北氏は、冒頭ひきこもり 8050 問題が生み出される背景について「高齢化、晩婚化、雇用の劣化など必然的な結果として現出する面がある」と指摘したうえで「8050 問題は人生の最後の場面で必ず顕在化する。親御さんが亡くなり介護が必要になったとき表面化する」と述べた。2015 年の国政調査によれば、40・50 代の未婚者で親と同居している人数は約 339 万人（2005 年は約 193 万人）あり、働いていない人数は約 77 万人に及ぶ。同年齢の未婚で単身者の人数約 227 万人（2005 年は約 158 万人）と比較しても増加度合いが激しいことがわかる。また 65 歳以上の高年齢単身者が約 600 万人いることから単身、同居にかかわらず「社会的孤立」という括りのなかで見守りの対象として既に福祉現場の課題になっている。

◇KHJ が実施したひこもり事例に関する調査

2017～18 年に実施された KHJ 全国ひきこもり家族会連合会の調査によれば、全国の困窮者支援窓口における年代別ひきこもり相談件数では、40 代が一番多く 30 代 50 代も相応の数がみられた。その一方で KHJ 家族会支部の調査によるひきこもる本人の年齢は 30 代が一番多く 40 代、５０代が減少していることから、親の高齢化で家族会へ参加しにくい状況がつくりだされている。また 109 箇所の相談機関で調査したところ来所する本人の年齢は 40 代が一番多く、家族の状況は父親との死別が最多で半数近くを占めていたほか、両親ともに死別した例も 16 例あった。

◇家族全体の孤立予防をするために必要なこと

8050 問題が加速するなか相談機関の利用が重要になるが、本人や家族が支援を受けたいと思って相談窓口を訪れても「本人を連れて来なければ支援できない」「担当者の異動で引き継ぎができない」などの理由で相談が途絶えるケースがある。そのため本人や家族が受け入れる支援の内容と支援側が提案できる内容が一致することが理想とされる。例えば親の介護を理由に家庭に訪問し、ひきこもったままできる仕事を宅配するなど本人や家族が抱える生活課題にどれだけ支援できるのかが問われる。このように本人と家族の情報を網羅的に集めたうえで**①出会い**（ひきこもりを解決することを目的としない関係構築のきっかけ）**②介入**（最も切実な課題へ提案を行う）**③見守り**（親亡き後貯金が底をついたときにどう見守ることができるかなど）を役割分担して多種職連携でチーム支援することが求められる。

◇自立＝依存先を増やす

川北氏は最後に「ひきこもり解決に限定せず、本人が少しでも楽になれること、メリットを感じることができる支援を受ける」ことを提案し「家に取り残され生活上の不安が高まればフードバンク等外部からの善意を受けることも大切」と述べ、そのために大事な考え方として熊谷晋一郎氏が提唱する「外部に依存先を増やす」ことを推奨。就労することで自立することを優先させるのではなく本人がプロ野球に行くなど一見すると自立とは思えない行為だが、それらの行為が本人が持つ情報のひとつとして社会につながるための接点にもなる。また「ピンチはチャンス、困りごとから外部と接点を結べるヒントもある」との見解を示した。

事業内容をまとめた報告書を発行します。詳細は 8 ページを参照。

北方ジャーナル
一人称で語る田中理事長の足跡

月刊誌北方ジャーナル２０１９年２月号が発刊されました（写真-１）。一人称という自分史の物語が周囲に興味関心を抱かせたこともあり、私の幼少期から今日までの足跡が「人」として全４頁にわたり紹介されました。本格的な不登校直前の中学時代の写真から発達障がいという言葉がない時期に手探りで実践した麻生「いきいき教室」の懐かしい写真など『私は何ものか』を知る資料となっています。人より遅れて大学入学後入ったサークル、グリーンアースクラブのメンバーとの集合写真は人と環境問題を考えることが社会を変えることにつながる、というソーシャルワークの学びにも相通じるものでした。

（田中　敦）

（写真-1）北方ジャーナル 2019 年 2 月号の記事

北海道新聞に居場所「よりどころ」の記事が掲載

2019/02/23 朝刊　(生活・くらし)

ひきこもる中高年とその親たち　8050問題を考える

㊥ SOS

胸の内　語り合う場を

「よりどころ」親の会で精神保健福祉士から、ひきこもる子どもとの向き合い方について学ぶ参加者たち

気持ちが軽く

空き家を改修

支援策を探る

©北海道新聞社

（写真-2）

２月23日付北海道新聞朝刊に３回シリーズで連載された「ひきこもる中高年とその親たち～８０５０問題を考える（第２回）ＳＯＳ」に居場所「よりどころ」の記事が掲載された（写真-２）。記事では、高年齢化するひきこもりの子どもを持つ親が、悲痛な胸の内を居場所で語り合う姿や、当事者会に参加後アルバイトをはじめた50代の参加者、ピアスタッフとして活躍するひきこもり経験者のコメントが掲載。そのほか、オホーツク管内の津別町で社会福祉協議会が空き家を利用した常設の居場所を設置し、地元企業で就労体験ができるよう計画していることなどが掲載された。

田中理事長は記事のおわりに「ひきこもりの背景にある生きづらさを可視化すると、社会に欠けているものがみえてくる。ひきこもりは社会全体で考える問題」と指摘した。

また同日の道央版には、２０１９年度も札幌市が居場所「よりどころ」の事業拡充を伝える記事が掲載され、それに先立つ２月１日、北海道新聞社論説委員室の嘉指博行・論説委員が当ＮＰＯの取り組みを夕刊一面の社説「今日の話題」にて取り上げた（写真-３）。

今日の話題

踏み出す力を

家から外に出るきっかけをつくり、寄り添う。就労など目標を設けることなく。札幌市が昨年6月から始めた新しいひきこもり支援「よりどころ」だ。

当事者、親の会をそれぞれ月1回開く。札幌市のＮＰＯ法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワークが委託を受け運営する。

当事者には自由に過ごせる居場所を提供する。話やゲームをし本を読んでもいい。親同士は話し合い、子への接し方を見つめ直す。スタッフはひきこもり経験者、精神保健福祉士ら。

予想を上回り当事者会に十数人、親の会に20～30人が訪れる。社会とつながりを持てていない人は少なくないということだろう。

10年以上ひきこもる50代の男性は、気持ちを知りたいと親の会にも参加。数カ月後、就職先を見つけた。二十数年ひきこもっていたが、アルバイトに就いた人も。

同じように悩む者同士が関わる中で自身を取り戻し、一歩を踏み出す力を得られた―。レター・ポストの田中敦理事長の見立てだ。

田中さんは20年間、支援を続ける。以前と異なり、就職後につまずく人が増え、ひきこもりの中高年化が進んだ。市の「よりどころ」を訪れる人も半数以上が40歳を超えている。

なのに、国の支援は39歳以下への就労が中心。田中さんは「年齢制限で置き去りにし、ひきこもりの長期化を招いた」と指摘する。

国はようやく、40歳以上の調査に乗り出した。求められるのは若者とは違った支援だろう。実績のある民間団体とも連携し、早期に対応してほしい。（嘉指　博行）

2019.2.1

（写真-3）

札幌市の委託事業　居場所「よりどころ」活動報告

札幌市の委託事業「集団型支援拠点設置運営業務」居場所「よりどころ」の当事者会、親の会が１月、２月にそれぞれ１回開催された。

親の会ではひきこもり地域支援センター主導による「家族心理教室」が２回にわたり実施され、ひきこもる子どもとの向き合い方について学んだ。

当事者会では、雑談やゲームを楽しんだ。時折聞こえる笑い声のなかに普段の生活ではみられない憩いの雰囲気を感じられた。開始前の時間を利用してピアスタッフによるクイズが出題された。「前回のオリンピックで金メダルを多く獲得した国ベスト５を上げて下さい」参加者は考え込みながらも積極的に答えてくれた。「棋は対話なり」ピアスタッフと将棋を指す参加者もあり、腕前の成果が披露される場面もみられた。

札幌市は来年度、引き続き「よりどころ」事業を拡充して毎月親の会、当事者会を各２回開催することを決めた。２月 23 日付北海道新聞によると、今年度のよりどころの参加者は親の会に述べ 234 人、当事者会に述べ 103 人の参加者があった（札幌市子ども未来局集約）。交流会に参加して気分が前向きになり休職していた仕事に復帰した方もいると伝えている。

３月４日は親の会、当事者会の合同企画「ひきこもりカフェ in 札幌」を開催し、親の立場、当事者の立場から発題して親と子が一堂に会すなかで交流を深めていく。開催内容については５月号に詳細を掲載する。

「よりどころ」開催のご案内（2019 年 4 月）

（当事者会）
①4 月 1 日（月）6 階・和室「樹」
②4 月 15 日（月）6 階・和室「樹」
（親の会）
①4 月 8 日（月）10 階・1010 会議室
②4 月 22 日（月）10 階・1010 会議室

開催会場：北海道立道民活動センター「かでる2.7」（札幌市中央区北 2 条西 7 丁目　道民活動センタービル）JR 札幌駅南口から徒歩 13 分
開催時間：いずれも午後 1 時～4 時まで
出入り自由　参加費は無料

ひきこもり外交官

さえきたいちさんとの対話⑤「出会いが人を見極める力を養う」

日本各地のひきこもりの現状を伝える「ひきこもり外交官」ことさえきたいちさんへのインタビュー第五回（最終回）です。

（聞き手・吉川修司）

「ひきこもり外交官」として全国を周っているわけですが、いつ頃から旅をはじめたのですか。

青春 18 切符で旅行し始めたのは２０００年頃です。本格的に動きだしたのは２０１１年頃で、私の住む地元で精神科医の中垣内正和さんの講演会があり、懇親会で 18 切符の話をしたら中垣内さんから「新潟に来てみないか」と誘われ、そこで知り合った人やＳＮＳも開始してさまざまな社会活動家とも知り合いになった。ジャーナリストの池上正樹さんとも関係を結ぶことができ、そこから東京の「庵-IORI-」（ひきこもりフューチャーセッションを隔月で開催）ともつながり一気に活動の範囲が広まりました。

地方へ出向く際に大事にしていることはありますか。

僕は「人」が大事だと思っていて、組織的なことは経験がないのでわからないが、出先で出会う人や周囲のことを考えながら行動していると、相手の立ち振る舞いをみて「こんな行動はないな」とか「とても人を大事にしているな」というように人を見極めることができるようになりました。その意味で、いろんな人たちと話をすることが大事だと思う。かつて僕が受けた支援の場で随分受け入れてもらったことがあり、そこで得られた安心して付き合える人との出会いも大きい経験でした。

日本各地を巡る原動力はそこにあるのかもしれませんね。いろんなお話を聴かせてもらいました。ありがとうございました。

こちら事務局！　今後の動き(2019年3月～)

◆「SANGOの会」例会のご案内

２０１９年３月は下記日程にて行います。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせてください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話でお問い合わせのうえ初心者の例会にお越しください。

《初心者の例会》

とき：３月27日（水）午後５時３０分から７時３０分まで

会場：札幌市社会福祉総合センター札幌市ボランティア活動センター４階 ボランティア活動室

（札幌市中央区大通西19丁目1-1　地下鉄東西線西18丁目駅下車徒歩３分）

《通常例会・初心者例会予定》は随時、当NPOのホームページで公開していきますのでご確認ください。http://letter-post.com/

◆ジャーナリスト 池上正樹氏講演会開催の予告

ひきこもり問題に詳しいジャーナリストの池上正樹氏による8050問題に関する講演会を開催します。詳細が決まり次第団体ホームページでお知らせします。

とき：６月９日（日）午後１時００分から４時００分まで（開場12:30）

会場：北翔大学北方圏学術情報センター「ポルト」５階　会議室Ａ

場　所：札幌市中央区南１条西22丁目１番１号（地下鉄円山公園駅下車徒歩５分）

参加対象：当事者、家族、支援者、関心のある一般参加者　参加費：500円

平成30年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成金事業

長期在宅ひきこもり当事者支援向け
家族アセスメントツール開発研究事業
報告書

～ひきこもり8050問題と生命の危機予防福祉推進に向けて～

特定非営利活動法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

☆新しい刊行物のご紹介

①長期在宅ひきこもり当事者支援向け家族アセスメントツール開発事業報告書～ひきこもり8050問題と生命の危機予防福祉推進へ向けて

（左・写真）8050問題解決のため長期在宅ひきこもり当事者の状態像を評価シートで分析、本人へのヒアリング調査結果、有識者を迎えた学習会の内容などが網羅されています。

A4版モノクロ35頁　郵送料込１冊600円

②手紙を活用したピア・アウトリーチ開発事業報告書－見返りを求めず緩やかにつながるための道標－

ひきこもりピアサポーターによる手紙（絵葉書）に特化したピア・アウトリーチの可能性とその普遍化を目指した報告書です。

A4版モノクロ50頁前後を予定　郵送料込１冊800円予定

刊行物については事務局までお問い合わせください

私たちの仲間になりませんか　会員募集をしています

正会員	賛助会員	寄付金
入会金 1,000円	入会金 1,000円	一口 1,000円～
年会費 3,000円	年会費 2,000円	

入会金、会費納入は、下記郵便振替口座へのお振り込みでお願いします。

●口座記号番号　02700-4-66261　●加入者名　レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

☆ 編集後記 ☆

今年度は、札幌で新たに開催した居場所「よりどころ」やサテライト事業として小樽、北広島、苫小牧で開催した「ひきこもりカフェ」に多くの方々が参加し、ご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。

（発行責任者　理事長　田中　敦）

無断複製はおやめください